歴史散歩

れきしさんぽ No.9

大善寺の石造美術を訪ねて（２）

大善寺玉垂宮境内に所在する石造物は、多種多様であり前号No.8に続き、大善寺玉垂宮の石造文化財と周辺の石造物を中心とした資料の紹介をしたいと思います。

(7) 芭蕉句碑（ばしょうくひ）

境内拝殿前東側の四角な台座に立つ石柱で、高さ1.7mほどの安山岩製の句碑です。句面は風化して読み難い。出典は元禄六年（1693）作の『薦獅子』春吟から選ばれたものです。

「春もやゝけしきとゝのふ月と梅」

側面に「文化十一年（1814）甲戌仲春日刻秋風庵暁雨、夜明庵瓦屑」の造立年と願主2名の刻文があります。

芭蕉塚（句碑）は全国にあり千基は下らぬものと推定されます。福岡県下でも70基近く発見されています。久留米市内では8基が知られています。

注1　草野資料館が平成10年3月に開催した「久留米の芭蕉句碑展」資料集に詳しく説明されています。

芭蕉句碑（玉垂宮境内）⑩

(8) 大善寺のサイの神さん

玉垂宮本殿北側に位置する佐野社と称する境内社にあり、大正元年（1912）一本松から移されたものです。地元では「サイの神」と呼ばれています。

古来人々は天変地異を恐れ、害虫、疫病のないことを念じ、山頂・谷間・用水路あたりに祝い木を供え、しめを張りました。

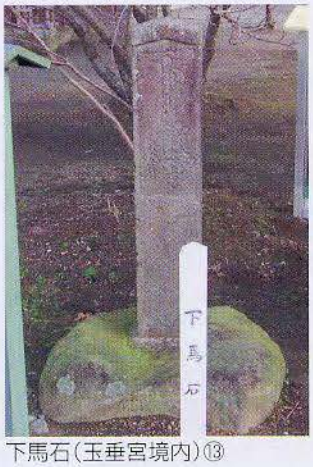
中世には、田の神・山の神が「幸いの神」となり、「サイの神」に転じ、旅行の安全・子孫繁栄などと習合することになりました。九州地方は性神の多い所で、現在、覆屋内に石彫の陽根が納められています。戦前、当地の芸者衆の参拝が多く、他に木製の陽物などが多数奉納されています。

大善寺のサイの神さん
（玉垂宮境内）⑫

(9) 下馬石（げばいし）

社寺などの境内で下馬すべきことを記した札を「下馬札」、または「下馬牌」と言います。板面に「下馬」・「下乗」の2文字を記すことから別名「二字札」とも称されています。この意味は、この札から先は乗馬・乗輿のまま入ることを許されないということです。一般には木製の札が多いようですが、玉垂宮境内の大鳥居の近くにある本石柱は、高さ1.75mで方柱に加工しています。

上端は屋根型に整え、額部に薄い庇を作り出して木札を形取っています。正面に大きく「下馬」の二文字が縁取りしたように刻字されています。



下馬石（玉垂宮境内）⑬

(10) 石虎

石虎（玉垂宮境内）⑪

寅年生れの人が還暦記念に奉納したもので珍しい遺物です。

匍匐した虎を彫ったもので、台石に「慶応二年丙寅出生者ハ大正十五年六十一歳ニ当ルヲ以テ同年会ヲ組織シ還暦記念トシテ之ヲ献納ス　大正十五年丙寅年十二月吉辰　大善寺同年会」とあり、抽選順で18名が連記されています。請負人は大石長太郎、石工は中古賀の緒方信助の名前が見えます。

3.大橋の地蔵堂周辺

大善寺玉垂宮の東、大橋のふもとに地蔵堂があります。その域内には、大橋関係の遺物や板碑等の石造物が数基見られます。

地蔵堂横の大橋関係石造物⑭

(1) 大橋の石柱と大橋由来碑・道標

現在、玉垂宮前を流れる広川は別名アラレ川や宮本川と呼ばれていました。江戸時代久留米城下から柳川に至る柳川街道のこの川に、慶安元年（1648）に土橋が架けられました。（この橋は、明治41年に描かれた御船山十景之図に「野路の大橋」として数えられています。）嘉永4年（1851）の大洪水によって、この土橋が流失したため、安政4年（1857）4月、当時の庄屋津留崎宇助の時代、大善寺村中島の村田甚助が工事監督となって石柱の桁橋として再建されました。橋の長さは13間（約25m）、巾2間2尺の規模がありました。石材は肥後天草から船で運搬しています。

以上は、由来碑の碑文に記された内容です。由来碑は大橋の石柱を利用し、昭和9年に建立されています。すぐ横には同様の石柱が立っています。天草石と呼ばれる石英粗面岩（流紋岩）の石材で、高さ3mで、上下2段に貫が通る穴が見られ、貫が木製であったと推定されます。

道標⑭

道標は柳川街道の大橋のふもとに立てられていたものと思われます。方柱の側面2面に「北 くるめ」・「南 やながわ」と彫られています。石材は大橋石柱と同様の天草石を利用しています。安武町追分にある道標（「左 くるめ　右 高良山」）と字体もよく似ています。

(2) 地蔵三尊板碑

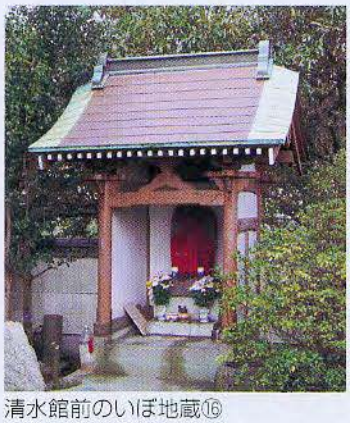
地蔵堂横に立つ自然石板碑で、高さ0.9m、幅1.0m、厚さ10cmほどの平石表面に地蔵立像三体を線刻しています。

地蔵三尊板碑⑭

中尊は左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、左右尊よりも大きく描かれています。左右の地蔵尊は共に仏器を持っています。描かれた三尊は表情や衣の流れなどが丹念に線刻され、顔は写実的で額部の生えぎわの線なども表現しています。銘は不明ですが、形式や線刻の方法等から造立時期は室町時代末期と推定されます。地蔵堂内の地蔵尊には正徳5年(1715)の古い銘があります。

4.いぼ地蔵

玉垂宮前の広川南岸に位置する「清水館」の前に祭祀されています。地蔵尊は舟形を背にし、右手に錫杖を支えています。裏面に文化5年(1808)の銘があります。地蔵をさすり、「いぼ」をさすって祈願すると「いぼ」が取れるとの迷信があります。


清水館前のいぼ地蔵⑯

5.朝日寺の石造物

夜明山朝日寺は、神子栄尊禅師が寛元3年(1245)に開いた臨済宗妙心寺派の禅寺です。寺には開山の師である栄尊和尚に関する資料や仏像、石造物等の文化財があります。

鎌倉時代の肖像彫刻の伝統をもった「木造神子栄尊坐像」は県指定、観音堂に安置されている三体の仏像は、鎌倉時代中頃～南北朝時代に製作されたもので、三体共に市の指定を受けています。境内には石造物として般若泉や鞭松石があります。(朝日寺については、歴史散歩No.2に詳しく説明があります。)

不毛霊跡⑰

朝日寺に隣接する大善寺小学校構内にある「不毛霊跡」碑は、栄尊和尚の出生に関連するものです。

その伝説とは次のような内容です。

平安時代末期、平家の横暴に対するクーデター謀議がわかり、鹿児島の鬼界ヶ島(硫黄島)に流された平康頼はその後許されて都に帰る途中、この地の豪族であった藤吉種継の屋敷に泊ったときに種継の娘と出会いました。娘は、後に男の子を産みました。ところが不思議なことに、この子は口光を発するので、親は驚いて裏のやぶに男の子を捨てました。しかし、七日七夜この状況が続いたと言われています。

その頃、三井郡柳坂の永勝寺(山本町)の元淋和尚が夢を見て、三潴に遊んで口から光を出し妙音を発して法華経を読む幼児がいたというのである。すぐ翌朝来てみると、夢に見たような男の子がいたので、直ちに袈裟に包んで寺に連れてかえって、その後心をこめて育てたのが、後年中国宋にも留学し、朝日寺を開いた栄尊和尚であり、夜明山の寺号もこの話からきたものと言われています。

和尚が捨てられた場所には草木も生えないと伝えられ、祟り塚として知られることとなり、その地を恐れて天明3年(1783)にこの碑が建てられたものです。

6.称名院

恵日山称名院は、天正2年(1574)に大本山善導寺の末寺として、18世増蓮弁誉上人が開いた浄土宗鎮西派に属する寺で、本尊は阿弥陀如来です。境内には山門付近に墓塔や石塔が集められています。中には宝篋印塔や地蔵板碑の残欠がありますが全体を知ることができません。その他には、境内観音堂の地蔵板碑と門前の石祠に納められている恵比須石像があります。

称名院の地蔵菩薩彫像板碑⑱

(1) 地蔵菩薩彫像板碑

境内観音堂に安置されている市指定の地蔵板碑です。高さ1.21m、幅0.63m、厚さ5cmの片岩質の薄い板状自然石に像高約50cmの地蔵尊を薄肉彫に彫出しています。頭光、身光を彫りくぼめ、正面向きで蓮座上に立つ地蔵尊は、左手に宝珠をもち、右手は下におろして与願印を結んでいます。

向かって右下に座った形の小さな仏像を配したのは異色で、願主の像とも考えられます。地蔵の上方部に三如来の種子を薄い薬研彫りで彫刻しています。板碑左側に、「応永二十八年」(1421)の銘が見られます。

弥名院前の恵比須石像⑲

(2) 恵比須石像

恵比須祭祀の歴史は平安時代にさかのぼりますが、信仰が普及したのは室町時代中頃になってからのことです。恵比須は、漁をもたらす異郷の神として、市場の守護神・商業神としてあがめられ、室町期になって七福神信仰が広まると、福神としても親しまれるようになりました。

恵比須といえば、一般に①狩衣・指貫・風折烏帽子を着用し、②右手に釣竿、左手に鯛を抱え、③破顔哄笑(呵々大笑)する福徳円満な神像を想像しますが、恵比須は必ずしも抱鯛の姿とは限りません。筑後地区では多くの「異相」の恵比須を見ることができます。

古く記録の中に「市恵比須」の記述が見られます。市の開始にあたり、商取引の平穏無事を守護し、その場に集う人々に幸をもたらすと信じて、「市神」を祭るのが古くからのならわしでした。恵比須もこの「市神」として祭られたのが市恵比須の始まりと思われます。

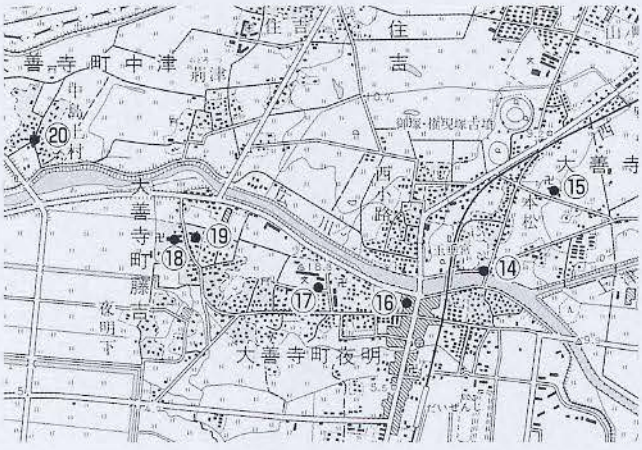
『筑後秘鑑』には、現在の大善寺町に「日本最古の市蛭子」の存在が記述されていますが、称名院前のこの石神(女形)が記述された恵比須石像と想定されます。

7. 中島の地蔵菩薩彫像板碑

江戸時代中頃、庄屋が藩に提出した報告で「居地蔵」と呼ばれた地蔵である。高さ94cm、幅65cm、厚さ10cm程の片岩質の自然石を用い、蓮座に立つ地蔵菩薩を薄い浮き彫りで現しています。

地蔵は左手に宝珠を捧げ、右手は下ろして与願印を結んでいるように見えますが、摩耗によって詳細は明らかになりません。像の上部に弥陀の種子を刻しています。様式・技法などは前述の称名院のそれと共通点が多く、製作時期・彫仏師が同じと推測されます。

中島の地蔵菩薩彫像板碑⑳



◆ 歴史散歩　No9 ◆

発行日　平成17年3月31日改訂
発　行　久留米市教育委員会
〒830−8520
福岡県久留米市城南町15−3
教育文化部文化財保護課　0942−30−9225
久留米市埋蔵文化財センター　0942−34−4995
久留米文化財収蔵館　0942−38−6194